

英語の関係代名詞についての一考察

小 川 勉

はじめに

関係代名詞は、ある節の一部（又は全部）をさらに別の節が修飾するためにいわば接着剤として使われるものである。2つの節を関係付けるために単に接続詞と代名詞を使うのではなく、関係代名詞という装置を使うという特徴ゆえに多くの言語学者の関心を惹き、様々な枠組みを用いた多くの分析がなされてきている。

本論文では、セクション1において現代英語における関係代名詞及びその先行詞のふるまいについて考察する。次いで、セクション2ではシェークスピアの英語における関係代名詞と先行詞について詳細に分析する。そして、セクション3では初期近代英語（シェークスピアの英語を含む）における先行詞の認可のしくみを提案する。最後のセクションで、初期近代英語と現代英語のふるまいを比較検討し、本論文の意義を述べる。

1. 現代英語における関係代名詞のふるまい

1.1 先行詞の構造

現代英語において、関係代名詞によって導かれる関係節（relative clause）には、制限的關係節、非制限的關係節、および自由關係節がある。まず、関係代

名詞と関連付けられる先行詞の構造について考察した上で、現代英語における具体例を観察する。

関係代名詞の先行詞（名詞句）が複数の名詞表現から構成されていて、補部の働きをする表現を取らない場合は、(I)か(II)のいずれかのパターンを、補部の働きをする表現（名詞句）を取る場合は、(III)のパターンをとる。¹⁾

(I) (I) 所有格の名詞 + 名詞 (N_{gen}+N)

(II) 所有格の代名詞+名詞 (N_{Pro}+N)

(III) [決定詞+名詞]+of+名詞句 ([D+N]+of+NP)

関係代名詞が取りうる先行詞は、(1)のパターンに現れる要素すべての場合((I)の場合は所有格の名詞+名詞、(II)の場合は所有格の代名詞+名詞、(III)の場合は[決定詞+名詞]+of+名詞句)と、(1)のパターンに現れる要素のうち、いずれか一つの名詞表現のみをその先行詞として取る場合がある。前者の場合は、名詞句全体が関係代名詞の先行詞として認可されることになる。しかし、後者の場合は名詞句の中の一部のみを関係代名詞の先行詞として認可するものであり、名詞句の中のそれぞれの要素について認可の可能性を検討する必要がある。

1.2 先行詞と関係代名詞節

このセクションでは、1.1のパターン(I)~(III)に現れる各構成要素を先行詞とする可能性を検討する。なお、関係代名詞の先行詞として名詞句全体を取る場合、その認可についての問題がいくらか指摘されている。²⁾しかしながら、それらの問題を考察するのは本論文の主たる目的ではないので、特別に言及する必要がある場合を除いて、名詞句全体を先行詞とする関係代名詞を含む構文については扱わない。

現代英語においては、パターン(III)の名詞句を先行詞とする場合のみ文法的、その他の場合はすべて非文法的である。³⁾ 具体的データとして以下のものがある。

(2) He made a list of all the writers who he thought were important in the

nineteenth century.

(3) A peaceful world cannot be built on a basis of populations that enjoy fighting and killing.

(4) the enemy's destruction of the city which was the capital of the empire

パターン (Ⅲ) において、関係代名詞が先行する名詞句内の第3要素 (NP) を先行詞とする場合、名詞句であることに加え、先行詞と関係代名詞が隣接し、連続した構成素をなすので先行詞の認可が行われる。第1要素 (D+N) を先行詞とする場合は、それが名詞句ではなく、同時に先行詞に接続していないので、この理由により先行詞の認可がなされないものと考えられる。

パターン (Ⅰ) および (Ⅱ) においても、第2要素は名詞句ではないので、関係代名詞の先行詞として認可されないものと考えられる。そして、関係代名詞が先行する名詞句内の第1要素を先行詞とする場合、第1要素は名詞の範疇に属し、同時にパターン (Ⅲ) の場合のように、先行詞と関係詞節とが隣接せず、連続した連鎖を形成しないために先行詞が認可されないものと考えられる。具体的な構造を用いた説明はセクション 1.4 で行う。このセクションで観察された文法性をまとめたのが表 1 である。

表 1 現代英語

	(Ⅰ)Ngen+N		(Ⅱ)ProN+N		(Ⅲ) [D+N]+of+NP	
先行詞	Ngen	N	ProN	N	D+N	NP
文法性	*	*	*	*	*	OK

1.3 関係代名詞節を含む文の構造

関係代名詞節と先行詞との関係を、制限的關係節を取り上げて概観する。他の非制限的關係節及び自由關係節も基本的には同じ関係を持つ。非制限的關係節は、その先行詞が関係詞に隣接していることが条件とはならない。本論では、制限的及び非制限的關係節が隣接している要素及びその内部の要素との関連付け (認可) について考察する。

制限的關係詞節 (restrictive relative clause) は、名詞句を制限修飾する付加詞節である。

(5) [NP [NP the student][CP who [IP ___ finishes the examination first]]] does not always get the best grade.

(5)では、名詞句の内部に關係節が埋め込まれている。そして、關係節の先頭には關係代名詞 *who* が現れており、*finish* の主語は表面上は現れない。この事実を説明するために、*who* は基底構造で *finish* の主語の位置に導入され、そこから CP 指定部へ移動されるとする分析が提案されている。

(6) [NP [NP the student_i] [CP who_i [IP t_i finishes the examination]]] does not always get the best grade.

(6)の構造で、*who_i* は痕跡 *t_i* を束縛し、痕跡は変項 (variable) と解釈される。また、*who* や *which* などの *wh* 關係代名詞は關係詞演算子 (relative operator) と呼ばれ、關係詞節は演算子・変項 (operator-variable) 構造を形成することになり、何かを叙述する付加詞とみなされる。さらに、*the student* が *who* と同一の指標を与えられ、*who_i* の先行詞であることが示される。このようにして、關係節は、先行詞について叙述する節として解釈される。

1.4 先行詞の構造

このセクションでは、關係代名詞の先行詞となる名詞句の構造について2つの代表的な分析を概観する。X' (X バー) 理論を用いた名詞句の内部構造の分析として、NP 分析が提唱された。その後、機能範疇を X' 理論を用いて分析する立場から DP 分析が提唱された。

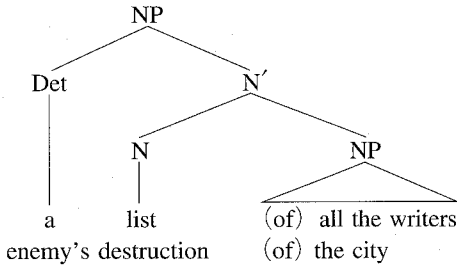
1.4.1 NP 分析

Jackendoff (1977) によって提唱された X' 理論は、句構造の一般化を可能にした。名詞を中心とした名詞句 (7a) と (7b) の構造を X' 理論を用いて記述すると(8)のようになる⁴⁾

(7) a. a list of all the writers

b. enemy's destruction of the city

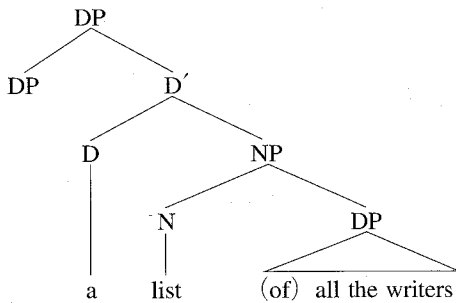
(8)

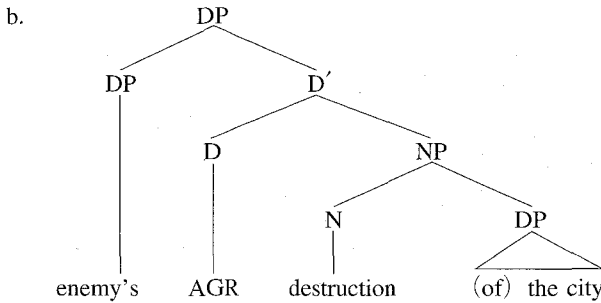


1.4.2 DP 分析

DP (determiner phrase) は, Brame (1982), Fukui (1986), Abney (1987) などで提案されている句範疇で, X' 理論に従い, D, D', D'' という投射が考えられる。Abney (1987) によれば, 英語においては, *the* や *a* (*an*) の冠詞, *this* や *that* の指示詞, *some* や *every* の数量詞, 属格を付与する AGR が DP の主要部となる。(7a) と (7b) の句構造は, DP 分析を用いるとそれぞれ, (9a) と (9b) のようになる。

(9) a.





ここで、*enemy* は DP の指定部の位置にあり、D の位置にある AGR から属格を付与されると考える。

1.5 先行詞の認可

セクション 1.2 で観察したように、現代英語においては、パターン (Ⅲ) の第 3 要素 (NP) を先行詞とする場合のみ文法的である。その場合、先行詞の認可がどのようなしくみに基づいて行われるかを述べる⁵⁾

1.5.1 先行詞が名詞句全体

まず、先行詞が NP であるとする NP 分析では、文(2)と(4)の先行詞と関係代名詞を含む連鎖はそれぞれ(10)と(11)の構造を持つ。

(10) [NP [Det a] [N' [N list] [NP (of) all the writers]]] [CP who [IP he thought ___ were important in the nineteenth century]]

(11) [NP [Det the enemy's] [N' [N destruction] [NP (of) the city]]] [CP which [IP ___ was the capital of the empire]]

関係代名詞が名詞句全体をその先行詞とする場合は、先行詞と関係代名詞が適切に関連付けられ、先行詞の認可が行われる。

(10)' [NP [Det a] [N' [N list] [NP (of) all the writers]]]_i [CP who_i [IP he thought *t_i* were important in the nineteenth century]]

(11)' [NP [Det the enemy's] [N' [N destruction] [NP (of) the city]]]_i [CP which_i [IP

t_i was the capital of the empire]]

また、全体の NP を構成している下位の構成素 NP, (10)は *all the writers*, (11)は *the city* の場合についても、先行詞が関係代名詞と隣接しているため、それぞれの関係代名詞節との関連付けが適切に行われ、先行詞の認可が行われる。

(10)" [NP [Det a] [N' [N list] [NP (of) all the writers]_i]] [CP who_i [IP he thought t_i were important in the nineteenth century]]

(11)" [NP [Det the enemy's] [N' [N destruction] [NP (of) the city]_i]] [CP which_i [IP t_i was the capital of the empire]]

次に、先行詞が DP であるとする DP 分析では、(12)と(13)のような構造を持つ。

(12) [DP [DP] [D' [D a] [NP [N list] [DP (of) all the writers]]]]_i [CP who_i [IP he thought t_i were important in the nineteenth century]]

(13) [DP [DP the enemy's] [D' [D AGR] [NP [N destruction] [DP (of) the city]]]]_i [CP which_i [IP t_i was the capital of the empire]]

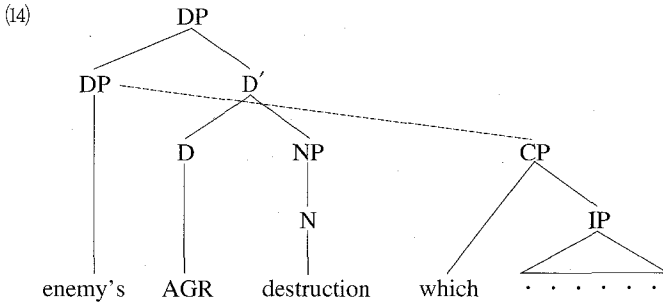
DP 分析においては、*all the writers* と *the city* という連鎖が句構造標識においては、DP という機能範疇に支配されている。しかし、機能範疇 DP は統語範疇 NP の特徴も併せ持つことを考慮すると、DP 分析をとった場合も、X' 分析を取った場合の分析を援用することが出来、先行詞の認可が行われる。

1.5.2 先行詞が名詞句の一部

セクション 1.2 において、パターン (I)~(III) の内の一部の連鎖が名詞句でない場合は、関係代名詞と隣接し連続した連鎖を形成していても、先行詞としては認可されないことを観察した。(パターン (I) と (II) の第 2 要素)

一方、パターン (I)~(III) において、その一部が名詞句の範疇を持つ場合は、先行詞が関係代名詞に隣接し、連続した構成素をなしている場合 (パターン (III) の第 3 要素) は、先行詞が認可されることを観察した。

パターン (I) と (II) の第 1 要素を関係代名詞の先行詞とする場合、先行詞と関係詞節とが隣接せず、そのため連続した連鎖を形成できないことになる。この関係について、具体的な構造を用いて説明する。



CP *which was the capital of the city* が DP *enemy's* と関係付けられるためには、全体の DP がもつ構造を破壊する必要がある。句構造標識においては、関係詞節 CP と先行詞 DP *enemy's* とを関係付ける枝 (branch) が全体の DP が持つ枝と交差することになる。句構造標識における枝の交差は許されていない。この結果、*enemy's* は関係代名詞の先行詞として認可されない。

2. シェークスピアの英語 (初期近代英語)

セクション1では、現代英語における関係代名詞の先行詞の認可について考察した (表1 参照)。

興味あることに、先行詞の認可に関して歴史的英語、例えばシェークスピアの英語において、現代英語では認可されない環境においても先行詞の認可が行われている場合がみられることが先行研究で言及されている。

荒木・中尾 (1980) によれば、PE では所有格の代名詞を先行詞にすることは余り行われませんが、Sh では珍しくないと指摘し、次の例を挙げている。

- (15) how much a fool was I, To be of such a weak and silly mind, To wail his death who lives, and must not die Till mutual overthrow of mortal kind !
(VEN 1017)

(人類がたがいに皆滅びてしまうまでは生きており、死ぬはずのない人を死んだと思い歎くような、弱い愚かな心を持つ自分は、何と馬鹿であつ

たことだろう)

- (16) My precious queen, forbear, And give true evidence to his love, which stands
An honorable trial. (ANT 1.03.74)

(私の大切な女王よ、耐えてくれ、そして立派に試練に耐えるこの自分の愛を本当に信じてくれ)

また、小野・伊藤(1993)では、関係詞の先行詞が人称代名詞または名詞の属格である構文は ModE 初期から 17 世紀まで多用されていると指摘し、次の例を挙げている。

- (17) this faire face and heavenly hew, Must grace his bed that conquers Asia
(1587 Marlowe, 1 Tamburlain, I. ii. 36-7)

- (18) Meaning (I had rather they were) his whom I love better than my life (1698
Dryden, Don Sebastian, IV, ii. 95)

(その宝石類は私が自分の命よりも愛している人のものになったほうがよいのです)

そして、(18)の例に関して、PE では *his bed that* ではなく *the bed of the man that (who)* となるであろうと述べている。

2.1 先行詞と関係詞節の構造

このセクションでは、シェークスピアの英語を含む初期近代英語における先行詞と関係詞節との関連付け(認可)について考察する。

(15)の関係する部分の連鎖が(19)である。

- (19) his death who lives, and must not die Till mutual overthrow of mortal kind

(19)の関係代名詞節及び先行詞は、次の構造を持つ。まず、先行詞を NP であるとする分析では、(20)のようになる。

- (20) [NP [NP [Det his] [N' [N death]]]] [CP who [IP ___ lives, and must not die Till mutual overthrow of mortal kind]]]

(20)において、関係代名詞が代名詞 *his* を先行詞とする場合、*his* は Det であり、同時に先行詞と関係詞が連続した連鎖を形成しないために先行詞の認可が

なされない。

次に、先行詞が DP であるとする分析においては、先行詞 *his* と関係代名詞が連続した連鎖を形成しないために先行詞の認可がなされない。⁹⁾

- (21) [DP [DP his] [D' [D AGR] [NP [N death]]]] [CP who [IP ___ lives, and must not die Till mutual overthrow of mortal kind]]]

先行詞の分析に NP の立場をとっても、DP の立場をとっても、先行代名詞が認可されるためには、先行詞が名詞句の性質を持ち、同時に先行詞と関係代名詞とが連続した連鎖を形成することが派生の過程で保証される必要がある。その派生の可能性を探ることは本論文の目的とするところではない。しかしながら重要なトピックではあるので、稿を改めて検討してみたい。

2.2

このセクションからは、シェークスピアの英語にみられるパターン (I)~(III) の用例の構造および意味について考察を加える。

2.2.1 制限的と非制限的

ここでは、パターン (I)~(III) をとる先行詞 (パターン (I) と (II) では第 1 要素、パターン (III) では第 3 要素) が、どのような環境に現れるかを観察する。まず、関連付けられる関係代名詞は、制限的であるか非制限的であるかについて考察する。データとして次のものがある。

- (22) パターン (I)

- a. Why? for taking one's part that's out of favor. (LR 1. 4. 99)
 b. I'll slit the villain's nose, that would have sent me to the gaol. SHR 5. 1. 131)

- (23) パターン (II)

- a. O how my heart abhors To hear him nam'd, and cannot come to him To wreak the love I bore my cousin Upon his body that hath slaughter'd him! (ROM 3. 5. 99)

b. I see thee compass'd with thy kingdom's pearl, That speak my salutation in their minds; Whose voices I desire aloud with mine: Hail, King of Scotland!(MAC 5. 9. 2)

(24) パターン (Ⅲ)

a. And I will follow, more for Silvia's love Than hate of Eglamour that goes with her.(TGV 5. 2. 53)

b. The flat transgression of a schoolboy, who being overjoy'd with finding a bird's nest, shows it his companion, and he steals it.(ADO 2. 1. 222)

関連するすべてのデータを種類別にまとめたのが表2である。

表2

先行詞	(Ⅰ)Ngen+N		(Ⅱ)NPro+N		(Ⅲ)[D+N]+of+NP		計
	Ngen	N	NPro	N	D+N	NP	
制限的	5	0	26	0	0	45	76
非制限的	29	0	10	0	4	56	99
計	34	0	36	0	4	101	175

パターン (Ⅰ) と (Ⅱ) においては第1要素, パターン (Ⅲ) においては第3要素を先行詞とする関係代名詞が, 制限的用法をとる場合と, 非制限的用法を取る場合の割合は, それぞれ, およそ1対5(5:29), 2.5対1(26:10), 1対1(45:56)となる。先行詞に所有格の名詞を取る場合は非制限的關係節が好まれ, 所有格の代名詞をとる場合は制限的關係節が好まれる傾向がある。代名詞はそれ自身, 指示機能を持たず, 先行詞の情報を間接的に受け継ぐだけである。それに対し, 名詞の場合は, それ自身の指示情報を直接持つので, 意味情報の観点から考察すると, 名詞が持つ情報量の方が代名詞が持つ情報量より豊かであるといえる。制限的關係節に比べ, 先行詞に対しより独立した立場にある非制限的關係節が先行詞と関連付けられる場合, 代名詞ではなく, それ自身指示機能を持ち, より独立性の高い名詞をその先行詞とすることが出来ると

考えられる。しかしながら、パターン（Ⅲ）の第3要素の場合には、この分析が当てはまらない。先行詞からの独立性に差のある制限的關係節と非制限的關係節が現れる頻度がほぼ同じであるからである。パターン（Ⅲ）の第3要素を先行詞とする場合の認可は、いわば無標の場合であり、パターン（Ⅰ）と（Ⅱ）の第1要素の場合の認可は、いわば有標の場合である。認可が有標の場合は、無標の場合には存在しない制約が働き、独特のふるまいをするものと考えられる。

2.2.2 第1要素の範疇 名詞句と代名詞

パターン（Ⅰ）と（Ⅱ）において第1要素がどのような形式を取るかを分析すると、名詞（句）を取る場合と代名詞を取る場合に二分される。データとして次のものがある。

(25) パターン（Ⅰ）

- a. How the knave jowls it to the ground, as if 'twere Cain's jaw-bone, that did the first murder ! (HAM 5. 1. 76)
- b. And I in going, madam, weep o'er my father's death anew ; but I must attend his Majesty's command, to whom I am now in ward, evermore in subjection. (AWW 1. 1. 3)

(26) パターン（Ⅱ）

- a. And now my tongue's use is to me no more Than an unstringed viol or a harp, Or like a cunning instrument cas'd up, Or being open, put into his hands That knows no touch to tune the harmony. (R2 1. 3. 162)
- b. It is so ; and you may, some of you, thank love for my blindness, who cannot see many a fair French city for one fair French maid that stands in my way. (H5 5. 2. 316)

第1要素に名詞（句）を取る場合と代名詞を取る場合はほぼ同数（34：36）（表2参照）である。代名詞と名詞（句）の特性から考えると、代名詞は、それが指示するものがすでに先行文脈に現れることにより主題化されやすい。この特性により、第1要素が代名詞の場合のほうが、先行詞として認識しやすくな

ることも考えられる。しかし、予測を裏付けるだけの有意な差は認められない。

2.2.3 第1要素と第2要素の意味

次に、パターン (I) と (II) の第1要素と第2要素の意味について考察する。第1要素として現れるのは、すべて人間[+ human]という意味(素性)を持っている。それに対し、第2要素にはさまざまな意味を持つ表現が現れる。ここでは、意味を次のように下位区分する?¹⁾

- (27) a. 身体 (の一部) (blood, body, bones, eyes, face, fingers, hands, head(s), heart-blood, jaw-bone, knees, lips, mouth, nose, skin)
 b. 行為・動作 (absence, breath, command, death, fall, looks, love, news, ruin, service, sleep, thanks, way, words)
 c. 感情・精神 (desires, fear, heart, hope, mercies, minds soul(s))
 d. 属性 (advantage, blindness, dooms-day, health, honor, house, last, life, name(s), part, places, reputation, rigor, sake, truth)
 e. 人間関係 (wife)

それぞれの意味の範疇に属する語を持つデータは次の通りである。

- (28) a. And, brother, here's the Earl of Wiltshire's blood, Whom I encounter'd as the battles join'd. (3H6 1. 1. 13)
 b. And will you credit this base drudge's words, That speaks he knows not what? (2H6 4. 2. 151)
 c. Methought their souls whose bodies Richard murther'd Came to my tent and cried on victory. (R3 5. 3. 230)
 d. Here is the scroll of every man's name, which is thought fit, through all Athens, to play in our entlurde before the Duke and the Duchess, on his wedding-day at night. (MND 1. 2. 4)
 e. But if my father had not scanted me, And hedg'd me by his wit to yield myself His wife who wins me by that means I told you, Yourself, renowned Prince, (MV 2. 1. 17)

表3 パターン (I) 及び (II) の第1要素

身体 (の一部)	行為・動作	感情・精神	属性	人間関係
23 (33%)	18 (26%)	10 (14%)	18 (26%)	1 (1%)

そして、関連するすべてのデータを意味に基づいてまとめたものが表3である。

第2要素として「身体 (の一部)」の意味を持つ場合が一番多く (33%)、次いで「行為・動作」と「属性」が多い (26%)。身体とその一部の関係は、全体の方が認識されやすい傾向がある。また、人とその行為、感情、属性との関係は、主体としての人間のほうが、その行為や属性よりも認識されやすい傾向がある。これに対し、「人間関係」の唯一の例は *his wife* である。用例が極端に少ないのは、第1要素と第2要素ともに人間である場合、第2要素の方が関係代名詞の先行詞として認識されやすいためこのような連鎖が避けられるためと考えられる。

2.2.4 パターン (I~II) とパターン (III)

パターン (I) と (II) において、第1要素が先行詞となる場合、その先行詞を認可する (関係代名詞と先行詞を関連付ける) 理論的にくみがないことを見てきた。一方、パターン (III) において第3要素を先行詞として認可することは理論的に可能である。言い換えれば、先行詞の認可において、後者の場合が無標であり、前者の場合が有標ということになる。無標の認可を保障する連鎖がありながら、有標の認可のしくみを持っているのである。シェークスピアの英語において、この無標の認可を許す連鎖と有標の認可を許す連鎖の出現の頻度を比較する。作品別の出現数をまとめたものが表4である。パターン (I) とパターン (II) は、第1要素を先行詞 (すべて人) とする場合であり、パターン (III) は第3要素を先行詞とする場合である。

パターン (I) とパターン (II) を合わせた数 (70) が、パターン (III) で人を先行詞とする場合 (69) とほぼ同じである。この点から、パターン (I)

英語の関係代名詞についての一考察

と(Ⅱ)は、先行詞の認可の点からいうと有標であるといえるが、パターン(Ⅲ)と自由に交替することができたと考えられる。

表 4

作品	年代	(Ⅰ)名詞句	(Ⅱ)代名詞	(Ⅲ)		(Ⅰ)+(Ⅱ)	(Ⅲ)
				人	物		
1 H 6	1589-90	1	1	0	0	2	0
2 H 6	1590-91	2	3	3	0	5	3
3 H 6	1590-91	4	2	3	1	6	4
R 3	1592-93	2	1	4	2	3	6
ERR	1592-94	1	0	2	1	1	3
SHR	1593-94	1	0	0	0	1	0
TGV	1594	0	0	1	0	0	1
LLL	1594-95	0	0	3	0	0	3
JN	1594-96	1	1	4	0	2	4
R 2	1595	1	3	2	2	4	4
ROM	1595-96	4	1	1	0	5	1
MND	1595-96	1	0	2	1	1	3
MV	1596-97	0	1	0	1	1	1
1 H 4	1596-97	2	0	4	1	2	5
2 H 4	1598	0	2	2	3	2	5
ADO	1598-99	2	0	2	0	2	2
H 5	1599	0	1	5	0	1	5
JC	1599	0	2	1	1	2	2
AYL	1599	2	0	1	0	2	1
HAM	1600-01	1	1	3	0	2	3
TN	1600-01	0	2	0	1	2	1
TRO	1601-02	1	0	0	0	1	0
AWW	1602-03	1	1	5	0	2	5
MM	1604	0	1	1	3	1	4
OTH	1604	0	1	0	0	1	0
LR	1605	1	1	2	0	2	2
MAC	1606	1	3	2	3	4	5
ANT	1606-07	0	1	2	1	1	3
COR	1607-08	1	2	2	2	3	4
TIM	1607-08	1	4	0	0	5	0
PER	1607-08	0	0	1	4	0	5
CYM	1609-10	1	0	5	0	1	5
WT	1610-11	0	0	3	1	0	4
TEM	1611	0	0	1	0	0	1
H 8	1612-13	1	2	2	4	3	6
計		33	37	69	32	70	101

2.2.5 パターン（Ⅲ）における有標性

パターン（Ⅲ）において、先行詞の認可に関し、第3要素を先行詞とする場合が無標である。しかしながら、シェークスピア用例には、第3要素ではなく [第1要素+第2要素] を先行詞とする場合が4例観察される。このような場合、認可のしくみに関して有標であるといえる。

- (29) As for the brat of this accursed duke, Whose father slew my father, he shall die. (3H6 1. 3. 4)
- (30) O thou, the earthly author of my blood, Whose youthful spirit, in me regenerate, Doth with a twofold vigor lift me up To reach at victory above my head. (R2 1. 3. 69)
- (31) I hear him mock The luck of Caesar, which the gods give men To excuse their after wrath. (ANT 5. 2. 285)
- (32) The shallowest thick-skin of that barren sort, Who Pyramus presented, in their sport, Forsook his scene and ent'red in a brake ; (MND 3. 2. 13)

3. 初期近代英語における先行詞の認可

パターン（Ⅰ）と（Ⅱ）においては第2要素、パターン（Ⅲ）においては第3要素が、関係代名詞の先行詞である場合は、関係代名詞が先行詞に隣接し連続した連鎖を成しているため、関係代名詞が持つ統語および意味素性と先行詞が持つ統語意味素性の照合が行われた結果、矛盾がなければ先行詞の認可が行われる。もし、両者の統語または意味素性に矛盾がある場合は、さらに名詞句全体の中から先行詞となりうる要素を探すことを続け、統語素性及び意味素性に矛盾のない要素を見つけた場合は、その要素が関係代名詞の先行詞として認可されることになる。ここでは、パターン（Ⅰ）と（Ⅱ）においては第1要素、パターン（Ⅲ）においては [第1要素+第2要素] がそれに該当する。この場合、先行詞は名詞句の性質を持たず、同時に構造上の条件である隣接性に違反している点に注目すべきである。初期近代英語においては、この違反が許され

ていたのである。

ここでの分析を要約すると次のような原則を仮定することができる。

- (32) パターン (I) と (II) においては第2要素, パターン (III) においては第3要素が先行詞と統語素性および意味素性において矛盾がない場合, 当該の要素は関係代名詞の先行詞であると認可される。(無標)

上述の無標の認可のしくみが働かない場合, その要素を含む名詞句内にあり, 関係代名詞と統語素性及び意味素性に矛盾のない名詞要素を先行詞とすることができる。(有標)

4. ま と め

初期近代英語 (本論文ではシェークスピアの英語を検討) における (I)~(III) のパターンにおいて, 各要素が関係代名詞の先行詞となりうる場合をまとめると表5のようになる。

表5 シェークスピアの英語 (初期近代英語)

	(I) Ngen+N		(II) ProN+N		(III) [D+N]+of+NP	
先行詞	Ngen	N	ProN	N	D+N	NP
文法性	OK	*	OK	*	OK	OK

これを現代英語での観察と比較したものが表6である。

表6

	(I) Ngen+N		(II) ProN+N		(III) [D+N]+of+NP	
先行詞	Ngen	N	ProN	N	D+N	NP
現代英語	*	*	*	*	*	OK
シェークスピアの英語	OK	*	OK	*	OK	OK

この比較を通して観察される興味ある事実は, 現代英語において許されない

形式でも、シェークスピアの英語では許される形式があるということである。セクション2で言及したように、先行研究ですでに観察されているものであるが、パターン（Ⅰ）と（Ⅱ）において第1要素が関係代名詞の先行詞として認可されるのである。

同時に、先行研究では観察されていない形式として、パターン（Ⅲ）において第1要素が関係代名詞の先行詞と認可される場合も認められる。

所有格の名詞表現を関係代名詞の先行詞とすることがあることは、先行研究において観察されてきたことである。しかしながら、有標であるがゆえにその分布や先行詞の認可のしくみについての研究はほとんど行われていない。この有標の認可のしくみと同時に、初期近代英語には見られるのに現代英語には見られない点については、歴史的な視点から消失のメカニズムを探ることも必要である。本論は、今まで十分光が当てられてこなかった構文を詳細に検討し、先行詞と関係代名詞のふるまい及び先行詞の認可のしくみを明らかにしたものである。

注

1) パターン（Ⅰ）に現れる名詞は、厳密には名詞だけとは限らない。修飾表現が付加された主要部名詞と句の間にある中間構造の場合もある。

2) 関係代名詞節とその先行詞との関係について、Smith (1964) 等は、所有格の名詞句＋名詞は、制限的關係詞節の先行詞になることはできないと指摘している。

(i) *the man's car that he bought last year

ただし Smith (1964) は、非制限的關係詞節の先行詞にはなることはできると指摘している。

(ii) the man's car, which he bought last year

また、Morrissey (1981) は、制限的關係詞節が明らかに部分的 (partitive) の解釈を持つ場合には、先行詞になることができるとして次の例文を挙げている。

(iii) I gave all my pencils that had my name on them to Bill.

3) パターン（Ⅲ）に関連して、Kuno (1980), Pustejovsky (1984) は、所有格代名詞を持った名詞句内の環境にある要素は、関係詞化すると非文になるか文法性が低下すると指摘し

ている。

- (i) a. *It is Nixon who I want to buy Mary's portrait of.
b. *Yesterday, I met the man who I had bought Mary's portrait of.

しかし、不定名詞句内であれば可能である。(Kuno (1980))

- (ii) a. It is Nixon who I want to buy a portrait of.
b. Yesterday, I met the man who I had bought a portrait of.

また、属格形名詞が文の焦点になっていると容認可能になりやすいことも Kuno (1980) によって指摘されている。

- (iii) a. This is the story that I haven't been able to get Mary's version of.
b. This is the term that I don't like Chomsky's definition of.
c. This is the event that I liked CBS's reporting of best of all.

4) (8)の句構造標識においては (of) *all the writers* という前置詞の括弧つきの連鎖を取るが、説明に際しては、前置詞無しの名詞句のみの *all the writers* を用いる。同様に、句構造標識においては、*the enemy's* という属格形をとるが、説明に際しては、その無屈折の形 *the enemy* を用いる。以下同様の扱いをする。

5) 関係代名詞とその先行詞の関係付け (認可) は、両者の間に統語素性および意味素性に矛盾が生じない場合にのみ行われる。

6) *the enemy's* は機能範疇としては、決定詞 (determiner) に属するが、*enemy* という名詞を主要部とする名詞句の特徴も併せ持っている。

7) 意味の分類は、先行詞の特性を捉えることを優先している。このため、意味 (素性) に基づく分類とは厳密に異なる点もあり、さらに分析が必要である。

Text

G. Blakemore Evans (textual editor) (1974) *The Riverside Shakespeare*. Boston: Houghton Mifflin.

参 考 文 献

Abney, S. P. (1987) *The English Noun Phrase in Its Sentential Aspect*. PhD. Dissertation. MIT.

荒木一雄・中尾祐治 (1980) 『シェークスピアの発音と文法』。東京: 荒武出版。

荒木一雄・宇賀治正朋 (1984) 『英語史ⅢA』。東京: 大修館。

Brame, "The Head-Selector Theory of Lexical Specifications and the Nonexistence of Coarse Categories," *Linguistic Analysis* 4, 275-343.

- Coopmans, P. (1989) "Where Stylistic and Syntactic Processes Meet: Locative Inversion in English," *Language* 65, 728-51.
- Fukui, N. (1986) *A Theory of Category Projection and Its Applications*. PhD. Dissertation. MIT.
- Jackendoff, R. (1977) *X' Syntax: A Study of Phrase Structure*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Jespersen, O. (1927) *A Modern English Grammar on Historical Principles, Part III Syntax*. London: George Allen & Unwin.
- 久野 暉 (1978) 『談話の文法』. 東京:大修館.
- Kuno, S. (1980) "Functional Syntax," in Moravcsik, E. A. and J. R. Wirth (eds.). *Syntax and Semantics 13: Current Approaches to Syntax*. New York: Academic Press.
- 前島儀一郎 (1977) 『シェークスピア・聖書の語法』. 東京:研究社.
- McCawley, J. D. (1988) *The Syntactic Phenomena of English*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Milsark, G. (1974) *Existential Sentences in English*. PhD. Dissertation. MIT.
- Morrissey, M. D. (1981) "Learner's Errors and Linguistic Description," *Lingua* 54, 277-294.
- Ogawa, T. (2003) "Some Notes on 'Relative Pronoun' *Than* in Shakespeare's Plays" *The Bulletin of the Faculty of Law and Letters* 14, Ehime University, 29-45.
- 小川 勉 (印刷中) 「シェークスピアの英語における関係代名詞 *As* の用法」, 『愛媛大学人学会論叢』第6号.
- 小野 捷・伊藤弘之 (1993) 『近代英語の発達』. 東京:英潮社.
- Pustejovsky, J. D. (1984) *Studies in Generalized Binding*, PhD. Dissertation. University of Massachusetts.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvick (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London and New York: Longman.
- Smith, C. S. (1964) "Determiners and Relative Clauses in Generative Grammar of English," *Language* 40, 37-52.
- Traugott, E. C. (1965) *A History of English Syntax*. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- 宇賀治正朋 (2000) 『英語の歴史』, 東京:開拓社.